

一九四五年八月の敗戦前から活動していた女性歌人たちが、立場を越え、「女」であることの一点で「女人短歌会」として結集し四九年九月に『女人短歌』を創刊する。北見志保子編集兼発行人のもと、阿部静枝（一八九九～一九七四）は、生方たつゑ、川上小夜子、五島美代子とともに編集委員を務める。静枝は、「編輯後記」に「山々のささやかな清流が集つて、新しい文化の流域を作りたい」と記している。女人短歌会は結成以来、男性歌人たちから批判や揶揄を浴びせられていたが、静枝は、〈女流歌壇〉などと括るのは本意ではないとしながらも「一般歌壇では容易に顧みられず、発表欲を充たし得ず、確実な作歌支柱を持ち得ない」まま、女の作品が「低位におかれ、それをなかば肯定する現状への抗議」の意味を込めて、作品練磨の機会と発表の機関を持つに至った、と反論した（「女流歌壇展望」『短歌声調』五〇年一月）。

静枝は、一八九九年、宮城県石森町（現登米市）に生まれ、東京女子高等師範学校に入学、ここで尾上柴舟から短歌の指導を受け、『水甕』に入会、林うたの名で作品を発表する。仙台での高等女学校教師時代に石原純の『玄土』にも参加するが、無産政党運動にかかわる弁護士の阿部温知との結婚後は、東京で夫とともに社会民衆党の活動にも奔走する。一九二二年四月小泉蓼三らの創刊した『ポトナム』には翌年から作品を発表、やがて選者となり、発行所を担うこともあった。同時に、無産政党運動の活動家として、評論家としても女性雑誌などへの寄稿が活発となり、夫の死後、太平洋戦争下では、無産政党の終焉とともに戦時下の女性の生き方などの発言が増してゆく。

そして敗戦後の作歌は、疎開先から始まるが、四五年一月上旬京、東京歌話会の発起人となり、四七年に『短歌季刊』を創刊、女性会員九名全員が女人短歌会の中心メンバーとなっている。

- ・ 生きたしと壕にひそみて生きおほせ戦ひ果てし秋にあふかも
（「この秋」『短歌研究』一九四五年一二月）
- ・ 戦争に面従しつつ全うせる身のおきどころ野に耕せり
（「街」『人民短歌』一九四六年三月）
- ・ 満州に行けとわが説きぬ征き拓き斃れたる人頭ち迷ふ（同右）
- ・ 占領国の冬荒るる風直ぐ長き脚に拂ひゆく米婦人士官
（「進駐軍のある風景」『八雲』一九四六年一二月）
- ・ 宮城の小暗く深きをたふとまず侘しき民の心変わりや（同右）

静枝は、『人民短歌』の二首にみるように、戦時下の自らの言動に責任を感じながら

も、「民の心変わり」に戸惑い、その一方で、颯爽と風を切って働く米国女性への羨望をも抱いたのであろう。

『女人短歌』や短歌総合誌などには、作品のみならず、女性歌人たちへのエールを送るべく評論も書き続けた。女人短歌会は「女人短歌叢書」として、五〇年に一三冊の歌集を出版した。そこには、五島美代子『風』、生方たつゑ『浅紅』、葛原妙子『橙黄』と並び静枝の『霜の道』もあった。この歌集は、短歌の虚構をめぐる問題提起をし、歌壇では若干問題になった程度だったが、折口信夫は「ふいくしよんを十分含んでみながら、それが真実性をもつてみて、自ら巧妙な感じをもたせる。ふいくしよんと言つたら阿部さんは憤るかもしれないと思うほど、真実感をもつ」と評価していた（『女人短歌』六号 五〇年一二月）。

『女人短歌』一六号（五三年六月）では、全会員が無記名で一〇首を掲載するという「実験」がなされた。静枝は「読人知らず式にこの集はまとめました。作家につながる興味や、既成概念を排して作品そのものを鑑賞してみたいと思いました」と「後記」に綴り、つぎのような、明らかに現実とは異なるとわかる短歌を発表したところ、葛原妙子に激しく反論されるのである。

- ・外に出ればあいの子と石打たる子傷の血も涙も黒きを流せ
- ・死の前のわが小休止あてどなく去りし男の國戀ひて見る

葛原は、詩における虚構には「自分自身のつびきならぬ内實のままであらはすことを忌避したい」場合と現象を土台としてそこから触発されてくる「虚の世界」「幻の世界」へと導きたい場合とがあるが、静枝のように「人の生活や、心に成り替つて歌ふといふ」場合は虚構とは言えないと糾弾した（「短歌に於ける虚構について」『女人短歌』一七号 五三年九月）。静枝は、以後、こうした短歌は発表していない。作歌に加えて、いわゆる評論家としての新聞や女性雑誌での執筆、生涯教育など社会的活動、民社党の地方議員としての活動も見落とせない。静枝は、一九七四年に他界、『女人短歌』は一九九七年に終刊となった。